

### 批判理論と会計理論：ロツホリンによる ハーバマス理論の適用(2・完)

NAGANO, Norio / 永野, 則雄

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経営学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei journal of business / 経営志林

(巻 / Volume)

32

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

1995-10-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003422>

# 批判理論と会計理論(2・完)

## — ロッホリンによるハーバマス理論の適用 —

永野 則雄

### 目 次

- 1 はじめに
  - 2 批判理論の位置付け
  - 3 機能主義に対する批判(以上, 前号)
  - 4 ハーバマス方法論の展開(以下, 今号)
  - 5 会計と組織との関係の分析
  - 6 おわりに
- 4 ハーバマス方法論の展開

ロッホリンは会計研究における言語の意義を強調するが、それもその2通りの関係を明らかにしている。その1つは、会計それ自体が言語であるという点である。こうした見方自体現在では目新しいものではないが、ロッホリンの見解に特徴的な点は会計という言語はそれが発言される歴史・組織・社会のコンテクストの中にその意味を見出すという見解である[Laughlin, 1987, p.481]。会計という技術的な現象、そうした可視的な要素を理解するためには、それに意味を与えているコンテクストを参照する必要があるというのである。会計が言語であるという認識が、これまでの会計研究では「見えなかったもの」を見えるようにしてくれると期待されているのである。

会計と言語との関係のもう1つは、そうした言語としての会計は言語を媒介にしてのみ接近・変化することができるということである[Laughlin, 1987, p.481]。これは単に会計の研究が言語を通して行なわれるというのではなく、会計への方法論的アプローチそれ自体が言語プロセスの本質の理解に基づくべきことを主張するものである。ロッホリンがハーバマスの考えを採用するのも、ハーバマスがこうした言語プロセスの本質を理解した上で方法論を組み立てているからである。こうした点は後でさらに説明することにする。

こうしたロッホリンによるハーバマスの方法論の会計研究における展開を見る前に、会計研究における批判理論の意義と、さらには批判理論の中でもハーバマスの方法論を採用する理由としてロッホリンが挙げているものを概観しておきたい。

批判理論が会計システムを理解・変化するために有用な用具を提供してくれるとして、ロッホリンは次の3つの理由を挙げている[Laughlin, 1987, p.484]。

- ① 批判理論は実践とダイナミックに結び付ける理論を提供してくれる。というのは、批判理論家にとって理論とは現実に影響をもつものでなければならないからである。
- ② 批判理論は批判・変化・発展を研究活動の重要な要素とみている。現状に対する批判に積極的な関心をもつことによって、より良い生活をえるための変化への要求をもつようになり、会計研究に倫理的な次元を導入することができる。
- ③ 批判理論は社会的な組織を歴史・社会のコンテクストにおいて眺める。会計がその意味を社会的な要因の中に見出し、会計の変化が社会的な要因の変化に依存しているかぎり、批判理論がそうした問題に向けた方法論的なフレームを提供してくれる。

さらにロッホリンは批判理論家であるホルクハイマー、アドルノ、マルクーゼ、ハーバマスの理論を概観した後に、次の3つの理由からハーバマスの方法論が会計の理解・変化のためにも、また社会現象をより広範に探求するための方法論的アプローチとして最も可能性があるものとしている[Laughlin, 1987, p.485]。

- ① ハーバマスの方法論は言語とコミュニケーションをその中心に据えているが、これは理解を生み、非暴力的な変化を起こすために必

要なものである。

- ② その方法論は探究を始める前に何らかの理想的な状態を前提としていない。理想は探究のプロセスを通して発見されるものとなっている。それゆえ、会計に適用する場合においても、会計システムの理想的な設計から出発する必要はなく、ディスコース (discourse)<sup>9)</sup> を通して改善策が発見されることになる。
- ③ その方法論は探究の対象である現象の理解・変化を生じさせるに必要なプロセスの性質と形態とを明確に具体化している。

こうした理由からロッホリンはハーバマスの方法論を採用するわけであるが、この方法論について注意しておかなければならないことがある。本節では方法論を、次節では会計と組織との関係を扱うことにしているが、この両者の議論が別個の事柄ではないということである。すなわち、ハーバマスにおいてはその社会理論と方法論が批判理論としては一体化しているからである。ハーバマスの最大の関心は「近代科学と人間行為との関係を考察すること」であり、したがって彼の社会理論の中心を成している「コミュニケーション行為論は、社会的行為論でありかつ科学論でもある」[森, 1984, 333頁]のである。ロッホリンも、ハーバマスの方法論の展開にあたっては、その社会理論としての側面も明らかにしながら議論を進めているが、本稿では紙幅の都合と説明の便宜のため方法論的な面だけを中心にとりあげる。

ロッホリンが採用するハーバマスの方法論は、「批判的理論の形成」「啓蒙過程の組織化」「戦略の選択」という、いわば三段階の方法論である。これについてハーバマスは次のように述べている。

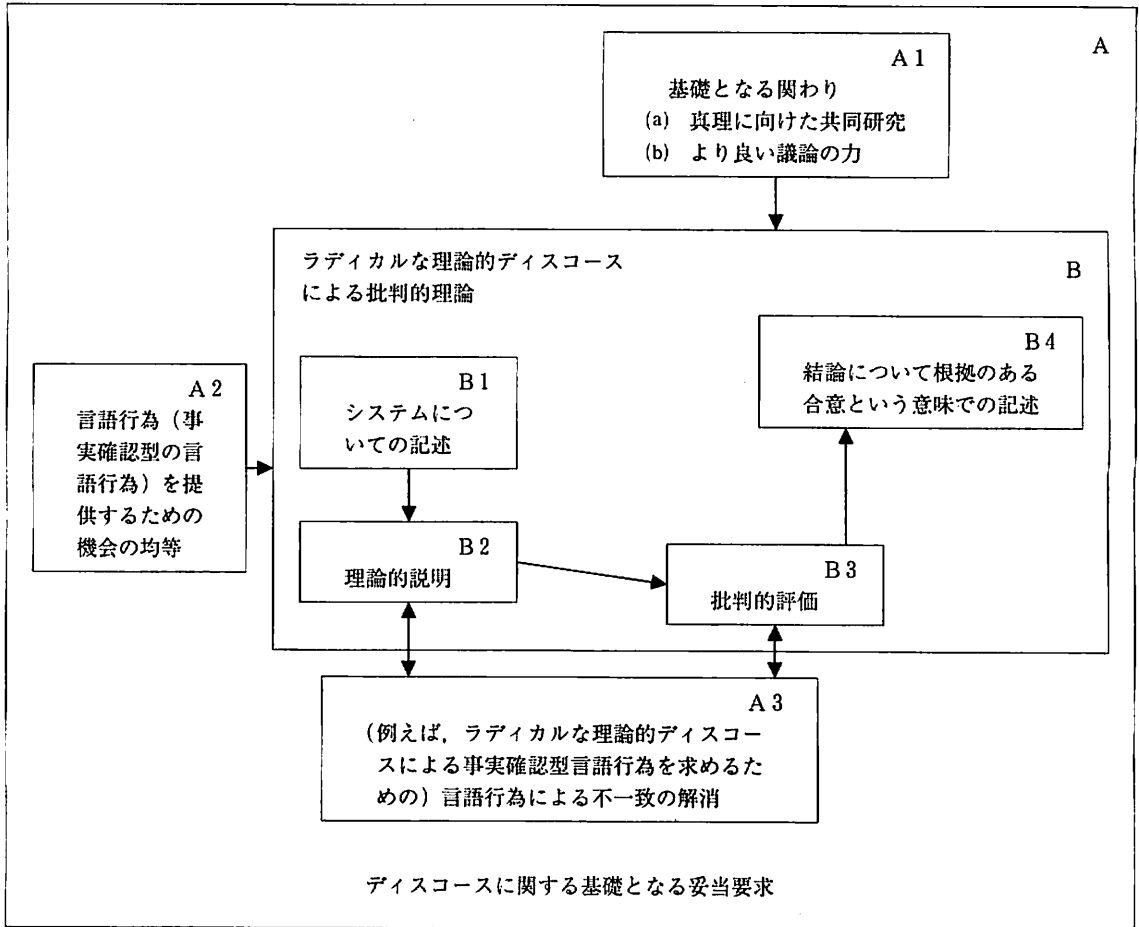
「理論と実践の関係を明らかにするためには、それぞれ異なる基準にてらして判定されるべき3つの機能をまず区別して考えなくてはならない。第一は、批判的理論の形成と推進であって、これらは科学的論議に堪えうるものでなくてはならない。第二は、啓蒙過程の組織化であって、その過程の中でそのような理論が適用され、特定の目標集団の中で反省過程を触発するとき、その理論がかけがえのない形で検証されることになる。そし

て第三は、適切な戦略の選択、戦術的問題の解決、政治闘争の指導である。第一の次元では、真なる言明が、第二の次元では、誠実な洞察が、そして第三の次元では、賢明な決断が、それぞれ要諦となる」[ハーバマス, 1975, 609-8頁]<sup>10)</sup>。

この文章は多分に政治組織における理論と実践の問題に関するものであるが、こうした「知識発展の三段階論」ともいべき議論が行なわれているのは、ハーバマスにあっては上記の引用文に示された個所だけであると思われる。ロッホリンはこの見解を広範に敷衍して会計という技術システムの理解・変化のための方法論として展開するのである。これを敷衍するために使われているのがハーバマスの社会理論であり、また言語の機能に注目したディスコースのプロセスに関する議論である。

ロッホリンは、知識発展の三段階のそれぞれの関係と、各段階における要素とその関係とを図式化して説明している。批判的理論の段階のひとつ前の段階として「無知同然 (quasi-ignorance) の段階」が指定されているが、これは探究を始める前の段階で探究の対象について知識がほとんどない状態である。探究を始めることによって知識の段階を進んでいくことになる。批判的理論の形成の段階を図にしたものが図6である [Laughlin, 1987, p.491]。他の2つの段階についても図式化されているが、内容は異なるものの同じような構造を示しているので、図6との相違点を説明するにとどめたい。

この図6を説明すると次のようである [Laughlin, 1987, pp.492-3]。まず、この図の中でもBで示した内側の部分は批判的理論が形成される行程を示しており、実際の理論的なディスコースの過程がその内容となっている。これに対してAで示した外側の部分はこうしたディスコースの過程の指針となるような前提を表わしている。A1の部分が意味することは、研究者がどのような態度でディスコースに関わるかを示したものである。そこでは、例えば代替的な説明が提出されている場合、その価値を決定するものは「より良い議論の力」であるとの同意がされているということである。共同で真理を研究するということも理論的

図6 批判的理論の形成の段階<sup>11)</sup>

なディスコースを行なうために必要な同意である。A2は、研究者はすべてその見解を提供する機会が均等であるという前提である<sup>12)</sup>。A3はこうした見解について不一致があれば、「ラディカルな理論的ディスコース」と呼ばれる過程を採用することによって解決されるものであることを示している。

内側のBの部分は批判的理論を形成するためにディスコースが行なわれる行程を示している。B1は、会計という技術システムについてなんらかの記述をすることから始まることを表わしている。いわば「見える」部分の記述である。次に、「見えない」部分、すなわち技術システムを生じさせる社会的な根源についての理論的な説明を設定しようと試みられる。これがB2である。そうして得られた説明を批判的に検討するのがB3で

ある。こうした手続を経て得られるのが「根拠のある合意としての記述」である批判的理論である(B4)。

次の段階である啓蒙の過程の目的は、基本的には批判的理論の形成と同じであり、会計システムの歴史的・構造的・技術的な根源に関する合意に達することである。ただし、2つの点で違いがある。その1つは、組織内の行為者を討論相手として参加させることである。その討論相手に対して研究者が批判的理論の形成の段階で得られた見解を提示することが、もう1つの違いである。組織内の行為者は研究対象についての見解と批判的なディスコースを採用する能力という点で研究者とは非対称性があり、こうしたことから研究者が組織内の行為者に対して「啓蒙」する過程でもある。そのため、時には精神分析における過程のように、

医者が患者に対して「治療的ディスコース」として批判的理論の段階における説明を組織内の行為者に対して示すのである。この場合、組織内の行為者は一方的に研究者の意見を押し付けられるのではない。彼らにもその見解を提供する機会が均等に与えられることによって、研究者の見解に受動的に反応するだけでなく、新たな理論を作り出すことに参加するのである。

啓蒙の段階で組織内の行為者が参加することが必要とされるのは、次の2点にある。1つは、組織内の研究者が、会計の技術的なシステムとその社会的な根源についての批判的な見解を提供するという点では、研究者と同じだけの価値があるということである。もう1つは、次の「戦略の選択」の段階で変化を引き起こす行為を引き出そうとすれば、変化を求める動機付けを組織内の行為者に起こさせることが重要であり、彼らの参加が必要となるとみられるからである。

最後の「戦略の選択」の段階は、啓蒙の段階からの結論が得られたところで、変化への戦略を提案・評価して、それに基づいて行動する過程である。この段階は形式的には前の2つの段階と似ている。内容的には、図Bの部分におけるプロセスが前の2つの段階では会計の技術的なシステムと社会的な根源についての記述を求めるのに対して、戦略の選択の段階では、戦略として可能なものを見出し、その理論的な正当化や批判的な評価を経て合意に達する点が異なっている。また、図Aの部分において示されるディスコースについての前提は、前の2つの段階では事実確認型の言語行為が用いられるが、この段階では規制型の言語行為が用いられるとされている。この戦略の選択の段階に関連して、会計における戦略として、会計の技術的なシステムの変化とその社会的な根源の変化との関係については3つ戦略を挙げて説明されている。これらの戦略の具体的な内容に立ち入る余裕もないが、それは会計の変化だけでなく、社会的な要因の変化をも射程に入れたものであることを記しておきたい。また、この段階では研究者にもまして組織内の行為者のほうが大きな役割を演じるとされているのである。

以上で見ると、ロッホリンがハーバマスの方法論を用いたのは、形式的な方法論としてではな

く、会計の技術的なシステムとその社会的なコンテキストである組織を考慮した、そうした意味で、会計の具体的なプログラムとしてである。すなわち、ハーバマスの社会理論を会計に適用しながら、その方法論も同時に論じているのである。例えば、会計のコンテキストとして社会的なものが想定されているが、これは単に社会的なものまでを視野に入れるということにとどまらず、そこにおいて想定されている組織や社会をハーバマスの社会理論という「生活世界」として捉えているのである。こうした背景をもつコンテキストと会計との関係については次節で扱う。

ロッホリンによるハーバマスの方法論の適用を検討することは、ハーバマスの広範囲にわたる科学論と社会理論を参照する必要があり、軽々にはできかねることである。ここでは、ハーバマスの方法論の適用についてのロッホリン自身が指摘する問題点を列挙するとどめたい。次の5つの問題点が挙げられている [Laughlin, 1987, pp.499-500]。

- ① ハーバマスの見解の正しさについて疑問が出されている。ハーバマスの理論が自由に考える人間を持ち上げ、社会の構造的な面を軽視しているとして、とりわけマルクス主義者の側からの批判がある。
- ② ハーバマスの考えは社会というマクロ・レベルを扱っており、会計が機能する場である組織というミクロ・レベルにおいて適用することが妥当かどうか問題がある。
- ③ ハーバマスは変化への要求を産み出すということで種々の「危機」の問題を扱っているが、現実の行為に導くような変化への動機付け・要求が明らかではない。
- ④ いわゆる「知識発展の三段階」において仮定されているディスコースの基準が十分に発達したものではない。
- ⑤ ハーバマスの方法論を会計に適用するにはコストと実行可能性に問題が出てくることもありえる。

## 5 会計と組織との関係の分析

ロッホリンがハーバマスの方法論を適用したも

のとしては、英国国教会の会計システムの分析がある。そこでは、ロツホリンは国教会の組織内の行為者と幾年にもわたって、その組織における会計システムの位置付けについてディスコースとしての議論を重ねたという [Laughlin, 1988, p. 20]。それは、その会計システムの現状を理解するためのものであり、特定の変化を自然と生じさせるようなものではない。すなわち、前述した批判的理論の形成の段階と啓蒙の過程の段階にとどまり、戦略の選択の段階にまで進んではない。それでも、その結果としてあきらかになったことは、会計システムが国教会における資源配分には役立っているものの、その「聖なる」ところまでは干渉できず、そうした意味ではその役割が限られているということである [Laughlin, 1988, p. 38]。こうした研究からロツホリンは、医療や大学といったパブリック・セクターにおいてはそれぞれの組織の「聖なる」要素がチャレンジを受けるような変化には抵抗が強い、と説くのである [Laughlin, 1988, p. 40; Power and Laughlin, 1992, p. 127]。

この研究ではロツホリンはハーバマスの社会理論を表に出して論じてはいない。そこで、次にハーバマスの社会理論を積極的に用いた研究を紹介することにしよう。

ハーバマスの社会理論において、またロツホリンが組織における会計を研究するにおいても重要な概念が「生活世界」「システム」「制御媒体」の3つである。これらの概念を平易に説明することも困難なものであるが、ともあれ、話しの出発点として簡単な説明を与えることにしよう [木前, 1987; 森, 1987; ピュージ, 1993]。

- ① 生活世界 (lifeworld) ……人々の日々の営みで形成される日常の生活実践の領域であり、文化・社会・人格といった構造的な要素の相互連関から成り立っている<sup>13)</sup>。
- ② システム (system) ……経済や政治といった、日常生活から分離され、貨幣や権力といった媒体によって調整される部分。
- ③ 制御媒体 (steering media) ……貨幣と権力といった、生活世界とシステムを相互に結び付ける媒体であり、強制力をもって行為を調整するもの。

ハーバマスにとっては「社会的秩序の問題は、システムが生活世界とどのような関係を形成するかという点にあり」[木前, 1987, 33頁]、この関係のつけ方には2つの道があるとして次のように論じられる。

「一つは、政治システムと経済システムのメディアとなる権力と貨幣の関係が、生活世界の内部まで浸透し、コミュニケーションにもとづく日常の実践に、戦略的な網の目を張り巡らすにまでいたるような道である。生活世界の微細な結びつきのなかに貨幣関係や権力関係が浸透し、言語によるコミュニケーションもそのような関係が目指す成果のための手段と化すまでになる。すでに触れたように、システム合理性が生活世界を従属させていくこの過程の徹底化は、『生活世界の植民地化 (Kolonialisierung der Lebenswelt)』と呼ばれる。もうひとつの道は、権力や貨幣の働きを、生活世界に媒介された契約関係を正当な法的規範によって枠づけ、この規範の正当性を公共的な実践的討議というコミュニケーションによって根拠づけていく道である。システムに固有の合理性が生活世界におけるコミュニケーションの合理性に枠づけられるようになるこの可能性を、彼は『生活世界の合理化 (Rationalisierung der Lebenswelt)』と呼んでいる。初期から後期にいたる資本主義社会の発展は、前者の側面が現実さまざまな危機傾向を生ぜしめながらも、後者の側面が失われることなく不断の可能性として進行しつづけた過程にほかならない」[木前, 1987, 33-4頁]。

システムによる生活世界の植民地化によって生活世界を構成する文化・社会・人格にさまざまな危機あるいは異常が生じることがある。極めて単純に言えば、技術的なシステムが社会に影響を与える、ということになろう。ロツホリンがハーバマスの社会理論を取り上げるのも、会計という技術的なシステムが社会から影響を受けるというだけでなく、逆に社会に対して影響を与えるということを主張するためであると思われるのである。会計のコンテクストでいえば、組織が生活世界あるいはこの場合の社会に該当する。以下では、ロツホリンが取り上げた例を用いて、会計と組織との

関係を扱うことにしよう。

ロッホリンはブロードベントらとともにイギリスの国民医療機構（National Health Service, NHS）を分析しており、ハーバマスの用語を使って図7に示すような図式化を行なっている [ Broadbent et al., 1991, p.11 ]<sup>14)</sup>。

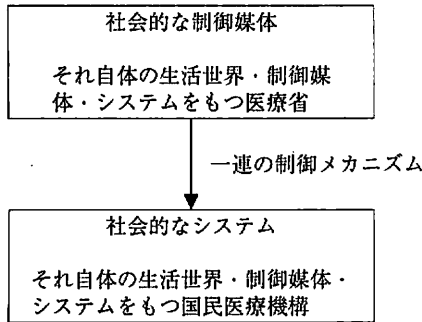


図7 医療省と国民医療機構の性質と関係

この図の矢印が「植民地化」を表わすのであるが、この図では「制御媒体によるシステムの植民地化」であり、ハーバマスのいう「システムによる生活世界の植民地化」にはなっていない。これには説明が少し必要である。

まず植民地化するのがシステムではなく制御媒体であることについて、ロッホリンらはハーバマスがドイツの法律の展開をたどって、制御媒体がはじめは生活世界の命令に従っていたものの、次第に手におえなくなり、ついにはシステムを変化させた例を引いて、この植民地化の理論を正当化している [ Broadbent et al., 1991, pp. 5 - 6 ]。この場合、制御媒体は直接的に、また変化したシステムを通して間接的に生活世界を植民地化したというのである。ともかく、制御媒体がシステムを植民地化するものであることが示されていることになる。

次の問題は、制御媒体とシステムのいずれにも「社会的 (societal)」という形容詞がついており、それぞれがそれ自身の生活世界・制御媒体・システムから構成されている点である。しかも、システムとして国民医療機構が挙げられているのはともかく、制御媒体として国の行政機関である医療省が示されている。たしかに医療省は国民医療機構を管轄している、その意味で制御しているかもしれないが、貨幣や権力という制御媒体とは同じ

ようにはみられないのである<sup>15)</sup>。この点はともかく、先の問題についていえば、ロッホリンらは、社会がその複雑性を増してくれば、制御媒体やシステムは多様化し制度化され、それ自身の生命をもつようになり、制度的な行為する精神・力をもつようになるから、制度や組織を社会のマイクロ・モデルとして示すことができるという [ Broadbent et al., 1991, p. 7 ]。私としては、ロッホリンらの制御媒体についてはその概念規定に疑問があり、また、それをマイクロ社会とみることはできないのではないかと考えている。しかし、システムがマイクロ社会であるというのは妥当であると思っている<sup>16)</sup>。

図7の矢印の側に示してある「一連の制御メカニズム」というのは、制御媒体がシステムを制御するさいに使う手段である。ここでは、医療省が国民医療機構を制御するためにくだった指示 (initiatives) が取り上げられ、検討されている。そうした指示には予算という会計の用具を用いたものもあると指摘する。また、そうした事実が組織における会計情報の制御媒体としての中心的地位を占めていることを示しているとして、会計情報の提供を管理することが植民地化の重要な要素であるとも指摘するのである [ Broadbent et al., 1991, p.19 ]。ロッホリンらの用法にしたがえば、会計情報は制御媒体ではなく制御メカニズムではないかと思われるところであるが、ともあれ会計情報がシステムを植民地化することを指摘している点は重要である。というのは、彼らの論文が「医療省が社会的な制御媒体としての役割から国民医療機構を、その組織としての生活世界とは合わない仕方では制御しようとしていることを論じようとする」 [ Broadbent et al., 1991, p.12 ] のであり、その際、会計が中心的な役割を果たしているからである。

ロッホリンらによれば、社会の期待と合っていないのが制御媒体（医療省）であるかシステム（国民医療機構）であるのか現在のところまったく不確定であるとしながらも、国民医療機構の変化に対して国民の激しい抗議があるところから、社会の期待に合っていないのは制御媒体の方である可能性が高まっているという。もしそうであるとすれば、この制御媒体が社会を植民地化する力

を潜在的にもっていることを示しているという [ Broadbent et al., 1991, pp. 26-7 ]。すなわち、医療省という制御媒体が国民医療機構というシステムを植民地化するだけでなく、イギリスの社会までも植民地化するということである。会計の観点からすれば、会計情報の管理を通してシステムに変化を起し、さらには社会に変化を起すということになる。こうした見方が会計理論にハーバマスの社会理論を適用することによって得られた成果であるといえよう。

制御媒体が組織というシステムに影響を及ぼすといっても、どのように組織が変化する（あるいは、変化しない）かについては、簡単に説明できるものではない。こうした点についてロッホリンはハーバマスの理論を部分的に利用しながら、組織変化のモデルとして論じている [ Laughlin, 1991 ]。本稿では、会計と組織との関係から離れることになるので、このモデルを論じることはない。ただ、そこで組織変化の1つの例として挙げられているデント (J. Dent) の研究事例が会計による組織の植民地化に当たるとされていることを付け加えておきたい<sup>19)</sup>。

以上述べてきたように、ロッホリンは、これまでの会計研究では「見えないもの」として会計の社会的なコンテキストを挙げるだけでなく、そうした社会的なコンテキストである組織や社会という生活世界が会計によって植民地化される場合もありえることを指摘するのである。こうしたことから「会計実践が技術的に中立であるというのは幻想である」と指摘するが、そうであっても会計は「実践における経済的理性にとって唯一の道具」となっているという [ Power and Laughlin, 1992, p. 132 ]。しかしながら環境問題にみられるように、経済的理性が社会を植民地化するという効果をもつのではないかと問題にしている。こうした点を明らかにする1つの基礎をハーバマスの批判理論が提供するものとも期待されているのである [ Power and Laughlin, 1992, p. 132 ]。ロッホリンがハーバマスの批判理論を会計研究に適用しようとする最終的な意図は、この辺りにあると思われるのである。

## 6 おわりに

ロッホリンは、機能主義では〈見えない〉ところを見るため、ハーバマスの批判理論を会計理論に適用しようとしている。そのため、まず機能主義のよってたつ前提をバーレル＝モーガンの分類図式によって明らかにした。その上で、ハーバマスの方法論と社会理論を適用しているのである。

ロッホリンによるハーバマス理論の適用が、批判理論のもつ批判の二重性から理解されるように、会計理論の現状に対する批判と会計システムの現状に対する批判を意図するものである。ロッホリンはしばしば「会計システムの変革」に言及するが、これも会計システムの現状に対する批判を踏まえてのことと思われる。しかしながら、会計システムの現状に対する批判も、それによる変革の方向についても、明確になっているとは言い難い。批判理論がいわば出来合いの批判の尺度をもつものではないので、会計システムの現場での経験を積み重ねることによって具体的な批判と変革の方向が出てくるものと期待されよう。ロッホリンによる英国国教会や国民医療機構の分析はそうした方向への試みとみることができる。

ロッホリンによる批判理論の適用の意義について言えば、現代を支配する近代科学的なパラダイムに対抗するものと考えられよう。哲学者の中村 [ 1992 ] は近代的な〈科学の知〉に対して〈臨床の知〉を提唱している。中村は科学の知を構成する3つの原理として、(1) 普遍主義、(2) 理論主義、(3) 客観主義を挙げている。機能主義はまさにこれに当てはまるものである。そして中村は「科学の知は、抽象的な普遍性によって、分析的に因果律に従う現実にかかわり、それを操作的に対象化するが、それに対して、臨床の知は、個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り、捉える働きをする」[ 中村, 1992, 135頁 ] という。

現在ではロッホリンにかぎらず「会計実践 (accounting practice)」という言葉が多用されているが [ 酒巻, 1992, 99頁 ], それだけに現場での経験を重視する〈臨床の知〉が必要とされるといえよう。ロッホリンの試みは、こうした〈臨床の



知)と相通じるものがあると思われるのである。

注

- 9) discourse は「討議」「討論」「言説」「談話」「言述」などと訳されるが、ハーバマスにあっては最初の2つの訳語が適当であろう。ハーバマスによれば「ディスコース」とは「発話が暗に持っている『妥当性要求』(Geltungsanspruch)すなわち、発話の妥当性の条件が充たされているという主張に対して直接に疑問が投げかけられたときに、その妥当性要求そのものを主題として検討する場合の討議をいう」[水谷, 1985, 147頁]とされている。
- 10) 引用文における「批判的理論」は科学的なディスコースの過程を経て生じる仮説とも言うべきものであり、本稿で扱っている「批判理論」とは別のものと考えられる。ドイツ語による原典が入手できないので確認できないが、その英訳版では critical theorems となっているので、ロッホリンではこれが使われている。ただし、日本語では theorem は「定理」とするのが一般的であるが、ここではここの意味を表わさないで訳書にしたがって「理論」とした。それは「理論的な仮説ないしは記述」を意味すると推測される。
- 11) 図における各要素の間の矢印が原因図とは異なる場合もある。これは、内容から判断し、また他の2つの段階の図とも比較・検討してからロッホリンに尋ねたうえで修正したものである。ロッホリン自身はこれらの図を暫定的なものと考えており、さらに修正の余地があると考えているようである。
- 12) 図6のA2に「事実確認型の言語行為」が記されているが、これは文の認知的な側面を意味するものである。研究者の事実確認型の言語行為によって研究対象についての見解が得られるのである。なお、こうした言語行為の類型についてはハーバマス[1990, 149頁以降]を参照されたい。
- 13) 「文化」「社会」「人格」についてハーバマスは次のように説明している。「文化とは知のストックのことであり、コミュニケーションの参加者たちは、世界におけるあるものについて了解しあうために、この知のストックから解釈を手に入れる。社会とは正統的な秩序のことであり、コミュニケ

ーション参加者たちは、この秩序によって社会的集団への帰属を規制し、よって連帯を確実にする。人格とは、主体が話したり行為したりすることができるようにし、したがって了解する過程に参加し、また自己の同一性を主張することができるようにさせている能力のことである」[ハーバマス, 1987, 44頁]。ここでの「社会」は生活世界を全体的な社会とすれば、それを構成する要素であり、意味が異なることに注意されたい。

- 14) ブロードベントはシェフィールド大学の講師を勤め、ロッホリンとの共同論文も多数ある。なお、ブロードベントとロッホリンは共にこの夏でシェフィールド大学を去ったということである。

国民医療機構はイギリスにおけるパブリック・セクターとしての医療部門である。サッチャー首相が登場して以来、イギリスにおいては国営企業あるいはパブリック・セクターの民営化という大きな流れがあるが、これらの部門では民営化されないまでも、「効率」を旗印にした改革が行われてきた。こうした組織改革を扱った論文もかなり目にする。

- 15) 医療省という団体がハーバマスの「制御媒体」の概念規定に該当するのかが疑問である。ただ、私のこうした疑問に対して、ロッホリンは、ハーバマスはこの点では説明が不足していると答えている。なお、医療省が政府の機関であり、そうした意味では政治システムの一部であるとも答えている。
- 16) 生活世界とシステムの2つの概念に関して、「それらをそのまま実体的な社会の構成要素と考えて、現実の社会諸領域に振り分けてしまう発想」が誤解であるとして、ハーバマス理解の主流であるそうした実体的な解釈ではなく、それらが方法論あるいは視点の違いによるものであるとする非実体的な解釈が説かれる[栗岡, 1991]。こうした非実体的な解釈のもとでは、組織などのミクロ社会も見方によってはシステムであるとも生活世界であるとも考えることができよう。後で取り上げるように、ロッホリンも組織が生活世界であると論じているのである。それゆえ生活世界とシステムとは相対的な概念ともみられるが、栗岡[1991]からは制御媒体が他の2つの概念と相対的なものであるとは読み取れない。

17) デントの研究については國部 [ 1993 ] にも紹介がある。

文献 (前号で記載したものは除いている)

木前利秋 (1987) 「理性の行方－問題設定と視座」藤原ほか (1987)。

栗岡幹英 (1991) 「生活世界とシステム・再考」『ソシオロジ』第35巻3号。

國部克彦 (1993) 「社会理論としての会計研究 (2)」『会計』第143号第4号。

中村雄二郎 (1992) 『臨床の知とは何か』岩波書店。

ユルゲン・ハーバマス (1975) 『理論と実践』細谷貞雄訳, 未来社。

ユルゲン・ハーバマス (1987) 『コミュニケーション的行為の理論 (下)』丸山高司ほか訳, 未来社。

水谷雅彦 (1985) 「〈討議〉と〈対話〉」『理想』No. 620。

森元孝 (1984) 「批判としての社会的行為論」『社会学評論』第35巻第3号。

森元孝 (1987) 「システムと生活世界」藤原ほか (1987)。

Broadbent, Jane, Richard Laughlin and Susan Read (1991), Recent Financial and Administrative Changes in the NHS; A Critical Theory Analysis, *Critical Perspectives on Accounting*, Vol. 2.

Laughlin, Richard C. (1987), Accounting Systems in Organisational Contexts : A Case for Critical Theory, *Accounting, Organizations and Society*, Vol. 12, No. 5.

Laughlin, Richard C. (1988), Accounting in its Social Context; An Analysis of the Accounting Systems of the Church of England, *Accounting, Auditing & Accountability Journal*, Vol. 1, No. 2.

Laughlin, Richard C. (1991), Environmental Disturbances and Organizational Transitions and Transformations : Some Alternative Models, *Organization Studies*, Vol. 12, No. 2.